子ども・教育・学校を語る
NO.52　2025 年 2 月号
立命館大学大学院教職研究科の教員によるエッセイを掲載していきます。

あなたにとっての『模倣の対象』って誰（何）ですか？

井戸　仁（本学教職研究科准教授　学校心理学、理科教育学）

私には、たくさんの師匠と呼ぶことのできる方がおられる。とりわけ教師としてのあるべき姿を教えていただいた師匠は、元筑波大学教授・東京成徳大学名誉教授の國分康孝先生（1930年11月10日－2018年 4 月 19 日）である。筑波大学等で先生の門下生でもないのだが、個人的に沢山のことを教えていただき、沢山のことを学ばせていただいた。國分先生は私が最も尊敬する大好きな先生のお一人である。

私が30代後半のころ、京都華頂大学の吉田博子先生と、2002 年 8 月に教育カウンセラー協会京都支部を立ち上げ、教育カウンセラー養成講座を開催したとき、最も喜んでくださり、すぐに京都まで駆けつけてくださったことは、今でもよく覚えている。

國分先生はよく私に教育に係る哲学の話をしてくださった。その中の一人に教育家の**アレクサンダー・サザーランド・ニール**（Alexander Sutherland Neill, 1883 年 10 月 17 日 – 1973 年 9 月 23 日）がいる。彼は、スコットランド出身の教育者で、イギリスの革新的な学校であるサマーヒル・スクールを創設した。彼の教育理念は、子どもの自由、自律、幸福を重視することである。子どもの自由と幸福を最優先し、自由と自己決定を尊重する実存主義的な教育が彼の思想である。「子どもは自由の中でこそ最もよく学ぶ」という理念を体現化しており、現代の教育にも多くの示唆を与えている。この思想はサマーヒル・スクールを通じて実践された。その考え方は、現在もオルタナティブ教育の分野で大きな影響を与えているが、一方で伝統的な教育との違いから、賛否両論があるのも事実である。

彼が教育方法論を教員に説くとき、「教師は旅行をした方が良い」と言ったそうである。旅行でも全く知らない地（海外とか）だそうだ。それは、そこには自分が思っていたものとは違う、異なった価値観がある可能性があるからだ。様々な価値観と出会い、知ることは、教師として大きく成長する、一つのきっかけになる。

一つの『現象』や『状況』（児童生徒であれば『行動』が主となるのだろうか）を見たとき、教員は一定の価値観でそのことを捉え、指導、助言や支援をすると考えられる。例えばいろんなところで出る話ではあるが、ウイスキーがボトルの半分まで入っている状況を見て「ウイスキーはもう半分しかない」ととらえるのか「ウイスキーはまだ半分ある」と捉えるのか、ということである。このような捉え方をリフレーミングという。様々な価値観を理解している教師は、人が叱るようなところを叱るのではなく、むしろ自己肯定感が高まるような言い方ができるようになるということである。

例えば、中学生が高校入試に行くとき、中学校の教員が高校の校門の前で点呼をしていた。遅刻の常習犯の A は、やはり集合時間のギリギリ 2 分前に走りながらやってきた。するとある教師 B が「A はいつもギリギリだぁ！今日みたいな日にギリギリになるなんてどうするんだ！」と叱った。またある教師 C は「しっかり時間内に来れたね。さぁ、気持ちに余裕をもって試験に臨んで来い！しっかり頑張って来いよ！」と激励した。同じ現象を見てもいろいろな言い方がある。ある保護者が自分の子どもに対し『この子は落ち着きが無くおしゃべりばかりしているんです。』と言われれば、『言語能力が高いということですね。』と、『無口でおとなしすぎるんです』と言われれば、『思慮深いのですね』って考えるということなんです。

リフレーミングの大切さは、ニールから教わったのであるが、結局國分先生から聞いた言葉が若い私にとっては、指針のような働きをしていたのである。國分先生こそが私にとっての模倣の対象だったのである。

結論はこうである。模倣の対象を持つことは教師生活を続けていくうえで、とても大切なことだと感じている。何か迷ったり、どう考えたらいいのかわからなくなった時、『〇〇さんならどうされるだろうか？』って考えると、羅針盤の様に進むべき道が示されていくように思うのである。

RITSUMEIKAN